

マティスの作品に影響を与えたミューズたち～その3～

山本 雅晴

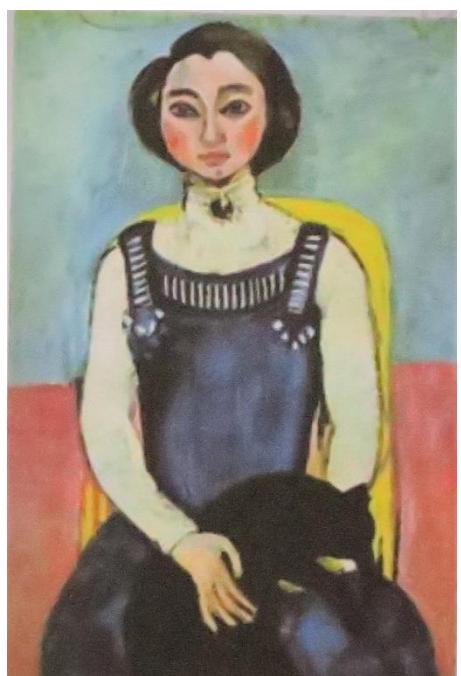
マルグリット・マティス（1894-8-31～1982）はマティスと未婚の母カミーユ・ジョブローとの間で生まれた。1899年秋：生みの母のカミーユとの別れ、アメリー・マティスが育ての母となる。マルグリットは楔となって家族のために尽くすことになる。マティスの絵の道具の準備・片付けやモデル、家事手伝い、弟たちの世話をなど。1901年7月：ジフテリア喉頭炎で緊急気管切開手術を麻酔なしで行われた。喉の10cmの傷跡を隠すリボン着用。1919年5月：損傷した気管を再建するための喉頭切開の手術を行い成功。1920年夏：エトルタで保養。1923年にマルグリットはジョルジュ・デュテュイと結婚。それ以降はマティスのモデルにはならない。1941年1月～4月：マティスの結腸癌などの手術の手配と看病をリディアと共に献身的に行い一命をとりとめる。1944年4月13日：レンヌでゲシュタポに捕獲され、過酷な拷問を受けたが、自状しなかったため収容所送りとなるが、救出され5か月後の9月にパリにもどった。1954年10月～11月：マティスの最後をリディアと見届ける。



1.マルグリット 1901, 個人蔵



2. マルグリット 1907 パリ・ピカソ美術館



3.黒猫を抱くマルグリット,1910 ポンピドー



4.縞ジャケット 1914 アーティゾン美術館

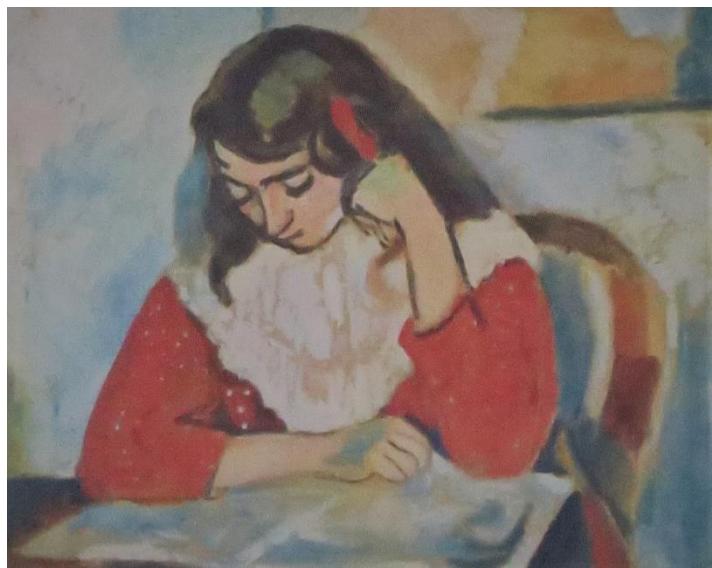


5.白とピンクの頭 1914 ポンピドー



6.画家の娘 1918 大原美術館

第二次世界大戦後、身をもって体験したナティスの残虐な行為などを追及し、マティスの業績を間接的にPRすることにも寄与した。進歩的なグルノーブル美術館にはマティスが寄贈したり、下図7の作品などがあった。しかし、それまで国立の名だたる美術館にマティス作品は殆どなかったが、急遽購入されたり、マティス家が寄贈したりして充実していくのに寄与した。1954年のマティスの死後のマルグリットの具体的な動向はヒラリー・スパークリングの本にも記述されていないし、情報を入手していない。彼女は1982年に87~88才で亡くなり、マティス美術館などに手持ちのマティス作品を遺贈したものと思う。



7. 読書するマルグリット 1906 グルノーブル美術館



8. 青いトック帽のマルグリット 1916 個人蔵



9. 眠っているマルグリットの肖像 1920年夏、エトルタ 個人蔵